

「十勝川が止まった！」：十勝川を大津川に切りかえる

地域産業
環境

第1章 十勝の平野や川がでるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、今、そして未来へ

用語

さくいん



昭和32年発行の地形図によるかつての十勝川下流部。□のところで2本に分かれている。今の浦幌十勝川が「十勝川」で、今の十勝川は「大津川」。

(国土地理院所蔵の1/5万地形図(浦幌)を使用、40%に縮小)

昭和35年(1960)の十勝川下流部は、旅来(豊頃町)や愛牛(浦幌町)の下流で2本に分かれていました。

当時の十勝川は、今の浦幌十勝川を流れ、浦幌町十勝太(トカチプト: アイヌ語で十勝川河口の意味)に河口がありました。(p170)

一方、今の十勝川下流の方は、大津川(オホツナイ: アイヌ語で深い枝川の意味)と呼ばれていました。

当時、十勝下流ぞいの愛牛・豊北地区(浦幌町)は洪水におそれやすい場所で、住民は「十勝川の流れを大津川に流してほしい」という願いを持っていました。

そこで、昭和35年(1960)から、十勝太への流れを少なくする工事が始まることになりました。

水の流れを大津川に

工事は、利別川でもおこなわれた(p207)、くいをたくさん打ちこむ「並杭」による「水制」と、枝をたばねてからめた「粗朶」によって、十勝川が運ぶ土砂をためて流れを大津川



の方に換えようというものでした。

昭和35~36年(1960~61)に、水制によって流れは大津川に向かい、水量は、大津川:十勝川で7:3になりました。(水制 p212)



流れの中にくいをならべて打ちこみ、土砂をためる「並杭水制」。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

大津川と十勝川が分かれる場所(浦幌町・豊頃町)と、流れを止めるための工事。

「十勝川の流れ」を止める

しかし、昭和37年(1962)大洪水が起き、愛牛・豊北では、はば6kmにまで水があふれ出しました。

これを機に、十勝川の水はすべて大津川へ流すためのしめ切り工事をすることが決まりました。

昭和37年(1962)、しめ切る前にまず水制工事をしました。

そして、昭和38年(1963)、水が少ない時期をめぐって、板を張り、土でうめ、そして土のう(土の入ったふくろ)を積み上げるといふ人の力を使う方法によって、十勝太(浦幌町)へ向かっていた「十勝川の流れ」をついに止めたのでした。



土のうなどによって十勝太(浦幌町)へ向かう流れが止められた。「十勝川が止まった!」との声が上がったという。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)

1 水制(すいせい): 岸を守り、岸から流れを遠ざける方法。流れの中に流れにくいもの(大型のコンクリートブロックやくいなど)をおくことで、その場所の流れをおさえ、川岸がけずられるのを防ぎ、川が運ぶ土砂をためる。(p212)

2 粗朶(そだ): 細い木の枝を集めてたばにしもの。土や川岸がくずれることや川底がけずられことを防いだり、土にうめて、水ぬきの地下水路(暗渠: あんきょ)をつくらしめるために使われる。

ふたた

うらほろと かちがわ

うらほろと かちどうすいる

再び十勝川とつながった浦幌十勝川... 浦幌十勝導水路

こうして、アイヌ文化の中で「オホツナイ」と呼ばれ、和人には「大津川」と名づけられ、大津という地名のもととなった川が、新しく十勝川となりました。

一方、かつての十勝川下流部は「浦幌十勝川」と名前をかえ、おもに下頃辺川と浦幌川からの水が流れる、水の量の少ない川となりました。

浦幌十勝川では、洪水は減りました。しかし、水量が少なくなったため土砂が流れにくくなり、河床(川底)には土砂堆積が見られるようになりました。

さらに、河口部では海砂が堆積し、川の水が海に流れ出さない「河口閉そく」が起きるようになりました。

このため、川の水位が高くなり、まわりの水はけが悪くなりました。周辺の農地が湿地化し、地下水位が高くなった市街地では、床下が水びたしになって汚物があふれるなど、生活環境も悪くなりました。

そこで、必要な水の量だけを浦幌十勝川に流すため、昭和57年(1982)、水門をつけた水路(浦幌十勝導水路)がつけられました。下頃辺川を通じて、十勝川と浦幌十勝川が再びつながったのです。



もとの十勝川(浦幌十勝川)と新しくつくられた導水路(浦幌町)。(国土地理院刊行の1/5万地形図(浦幌)を使用、70%に縮小)



工事中の導水路。後ろが導水門。(写真:『十勝川写真で綴る変遷』より)



浦幌十勝導水路。

もう少し細かいこと

浦幌十勝導水路記念碑の碑文

浦幌十勝導水路管理所(浦幌町)には、「浦幌十勝導水路記念碑」が建てられています。碑文には、次のように、導水路工事を願った地元の人たち(期成会)の思いと喜びが記されています。

「昭和三十八年九月浦幌十勝川(十勝太河口側)の洪水防止を目的としトイトッキ地点に締切堤を築造して浦幌十勝川への分流を阻止した。

以来洪水は解消され飛躍的な営農の安定と拡大が図られたが、流量の減少による滞流と土砂の堆積及び河口の閉そくにより水位が上昇し流域一帯の内水排除が困難となって、農地の効果的活用の支障となるなどの問題が発生した。

このため関係住民の悲願により昭和四十六年期成会を結成、浦幌十勝川への導水を国に強力に要請、関係各位の特格なる配慮により昭和四十七年これが浦幌十勝導水路工事として採択となり約九十億円余の巨費を投入して工事の完成をみるに至った。

この偉業を記念し、なお一層の地域の発展を願いこの碑を建立する。

昭和五十七年六月 浦幌十勝川改修工事促進期成会建之



浦幌十勝導水路記念碑。管理所の敷地に建てられている。

第1章 十勝の平野や川ができるまで

第2章 先史時代と川

第3章 アイヌ文化と川

第4章 十勝開拓と川

第5章 発展、そして未来へ

用語

さくいん

3 堆積(たいせき): 積み重なること。たまること。
4 期成会(きせいかい): あることの実現を望み、そのために活動する人たちの集まり。
5 内水(ないすい): 大きな川に流れこむはずの水。大きな川の水位が上がると、この内水が流れこむことができなくなり、堤防(ていぼう)のまわりにたまる。これを内水はらんたという。内水を流し出すことを「内水排除(ないすいはいじょ)」という。